

浄土

1995・12

人間の性(さが) 藤堂恭俊台下

法然上人と私◇茅野秀夫

悲の教育◇小川有順

【特集】

阪神大震災をふり返って

【連載】

魅せられて映画に……………丸林久信

外国で生活して……………井上春樹

共に生きる……………御所野洋幸

誌上特設ぎゃらりい

遊行期 大島泰生の仏画





咲いたら、幸せ。

楽しい、嬉しい。

ちょっと切ない、なつかしい。

いろんな話をしたり、聞いたり。

そんな何気ないことが、人と人との
固い絆の第一歩。

それぞれの人の、それぞれのお話に
花を咲かせるお手伝い。

安い市外電話の、0088です。

日本を楽しくする電話

0088

お問い合わせ・お申し込みは、日本テレコムお客様センターまでお気軽に。



0088-82 (無料)

または 0120-0088-82

●受付時間 9:00～23:00 (年中無休)

遊行期

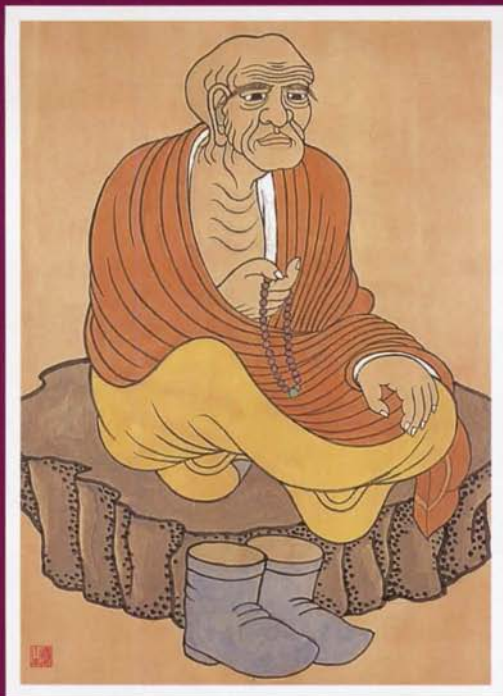
大島泰生(泰雄)の仏画







白衣観音



スピンダ

古来、インドにおいて一種の理想とされた人生観に、人生を四期に分ける考え方がある。最初を〈学生期〉といい、読んで字のごとく、いわゆる勉強をする時期である。次に〈家住期〉。仕事に精を出し、家庭を築く時期を迎える。三つ目は〈林住期〉。旅をして人生を考える時期。そして最後に〈遊行期〉。魂を開放し、自由な心境に入る時期。人の一生は勿論さまざまではあるが、たとえば、特に老年をこのように生きられたとしたら、それは素晴らしいことではないだろうか。

作家の、故武田泰淳氏の実兄、大島泰雄氏には水産学の権威としての激しく忙しい実人生があり、その面での貢献、評価は夙に極めて高いものがある。けれど、ある意味でそれとは別に、晩年において氏はもうひとつの輝きを見せることになる。独学、まったくの趣味で描かれた仏画ではあるが、悠々と、しかし精魂のこもった一筆一筆には、まさに〈遊行期〉の心境がある。

四度にわたった連載はおかげさまで好評のうちに、今回で最終回を迎えるが、最後に、この掲載を快く承諾して下さった奥さま、大島淑さんに深く深く感謝したい。

(編集部)

浄土

じょうど

1995/12月号 目次



カラーグラビア遊行期	仏画=大島泰生	3
法然上人の心を探る	藤堂恭俊台下	8
法然上人と私	茅野秀夫	14
魅せられて映画に	丸林久信	24
外国で生活して	井上春樹	32
コラム		39
表紙は語る	御所野洋幸	40
阪神大震災をふり返って	川副春海	44
	平尾弘泉	
	明石和成	
コラム		57
悲の教育	小川有順	58
J フォーラム		61
事務局便り		68
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下

表紙撮影=御所野洋幸

アートディレクション=近藤十四郎

巻頭連載

人間の性

(さが)

——法然上人の心を探る(3)——

大本山増上寺法主

藤堂恭俊
台下

今年の九月上旬であつたか、さだかでないが、考えようのない悲しい、恐ろしいことが事実となつてあらわれ、心を痛めた。

それは、男子高校生が母親を刺し殺したという暗いニュースに続いて、さらに、そのあとを追うように、女子高校生が母親を焼死させるという惨事が報道され、沈みゆくわが心を抑える術すらなかったことである。母親に手向けるに、ただただ南無阿弥陀仏と宝号をとなえるばかりだった。興奮状態からさめた子らの、身の置きどころもない心情を察しながら、立派に立ち直つてまともな人になれかしと願いつつ、届けよとばかり心を込めてお念仏を申し続けた。

私はその時ふとおもつた。この子らが体を使つてこのような行動をあえてする以前に、おそらく親子の間に言葉を使つてのはげしいやりとりを、来る日もくる日も重ねたことであろう。言葉は自分のおもいを他に伝えるに役立つ。しかしその発信地を注視すべきである。私は明德幼稚園の園だよりに「九月のことは」として、「叱ることばは、怒りの心・憎しみの心の発散でないように、ど

うか、わが愛し子がよい子に育つようにという願い、あつい思いのこもった言葉であれば、子は素直に聞き入れ、すくすく育つ」と綴った。仏教では身と口とをとおした行い（身業しんごうと口業くごう）よりも、心のはたらき（心業）を重視する所以である。

ことのおこりはともかく、わが子をいとおしく思うのは母ごころである。わが子の不行跡に心を碎き、何とぞまともな高校生になって、しっかり勉強して欲しいという切なるおもいは、忠告の言葉となつて伝えられた。その母のあつい思いのこもった忠告を、子らはさかしまに受けとり、たかぶる感情が理性の堤防を決壊せしめ、ついに報いるに母親を死に至らしめた。つまり、親と子の会話が、いな、心がかよわずに脱線したといつてよい。あたかも、海にそそぐ大河の流れにさからつて、潮流がすさまじい勢いで遡るように、エスカレートした子の怒りは興奮の絶頂に達して、母ごころを無視するかのように激突し、無惨にも怒りの炎のなかに呑みこんでしまった。

この怒り腹だちは人間の性の一つとして、生まれながらにして一律平等に具えている。仏教ではこれを瞋恚と呼んでいる。人はおよそ毎日、この瞋恚に大なり、小なり振りまわされたり、制御したり綱引きを演じている。しかしひとたび瞋恚の炎が燃えさかると身も、心も翻弄されて、ついに焼きつくされてしまふ。歯止めの役を担っている理性も、期待に反して作動しないほど恐ろしい力を發揮する。ご用心、ご用心。

この瞋恚という怒り腹だけが人間の性ではない。このほかに、飽くことを知らない、もつともつと欲しいというむさぼり、つまり足ることを知らない強欲を貪欲とんよくと言い、さらに理性によつてものの道理を、よくよくわかつていると自負していても、豈に計らんや、からだ全体をとおすと感情に大きく支配されるから、本當にわかつていないという道理に暗いことを愚癡ぐちという。これら人間の性を仏教では結使けつしとも、煩惱ぼんのうとも呼んでいるが、それらを代表するのが

貪・瞋・癡の三つである。

ともかく人は性、学歴、職業、地位、名誉や年齢といった相違があつても、おしなべて一律平等にこの性を生まれながら具えているから、教えられたり、練習をかさねたりしなくても、機縁を得ればいつでも、どこでも自然発生的に活動をはじめ。まことに始末のわるいはたらきをするので、うっかりするとむさぼりの泥沼に足を引きずられて溺れたり、怒り腹だちの燃えさかる炎のただ中に転落してわが身を焼いたり、はげしい感情のおもむくままに理性の堤が決壊すると、ものの道理に暗いばかりに躓き、転んだりする。そうした性を生来具えた必然として来る日も、来る日も生涯にわたってお付き合ひしなければならぬ。まさに人生は、これらによって色濃く織りあげられてゆく、まったく油断も隙もない修羅の巷でもある。

法然上人はこの結使・煩惱を「悪業のおもはるゝ事は、一切凡夫のくせ」(『十箇条問答』)とも、「凡夫の習ひ」(『一百四十五箇条問答』)と指摘し、人に「目

鼻のあるがごとし」(『上人と明遍との問答』)と言い切っている。理性によってこの人間の性を制御し得る間はともかく、それも最終的に期待できないとあつては、法然上人は解決の道をいづこに見出したであらうか。

貪瞋癡をこらば、なお惡趣へゆくべきまとひのをこりたるぞと意えて、是をとむべき也。しかれどもいまだ煩惱具足のわれらならば、かく意えたれどもつねに煩惱はをこる也。をこれども煩惱をば心のまらう人とし念仏をば心のあるじとしつれば、あながちに往生をばさへぬ也

と、『七箇条の起請文』の上に解決の道を示している。今自分がとりくんでいる念仏するという目的意識を堅持し押し進めるならば、煩惱などにお付き合ひする暇もなく、お相手しないですむのである。という、いかにも至難のように思われるであろうが、主人公阿弥陀仏のみ名を南無阿弥陀仏とおとなえしつ、み心に触れ、お力を頂くのであるから、おのずから客人まろうどとお付き合ひは怠りがちとならざるを得ないのである。

特別寄稿

包越

法然上人と私

茅野秀夫

法然上人ほど私にとって大きな影響を与えてくれた人物はおりません。

人生において真の尊さに目覚めさせ、そして、私が自ら法然念仏から編み出した「法然念仏による称名超格思惟法」により絶えず仕事に対する指針を与えてくれるからです。まさに、自らの人生の宗として目を開くことが出来ました。

日本において法然上人ほど真剣に仏教の教えを学び、そしてどこまでも自己に、また真実に対して、忠実に悩みぬいた宗教家はいないように思います。

比叡山において「智慧の法然坊」とまでいわれ、将来を囑望された法然上人が30年にも及ぶ修行にもかかわらず、「仏教は多しと雖も、所詮は戒・定・恵の三学に過ぎず。……然るに我がこの身は戒行に於いて一戒もたもたず、禪定においても一もこれを得ず。智慧においても斷惑証果の正智を得ず」と嘆き悲しみ、そしてついに善導大師の「観経疏」の「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行往座臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるは、これを正定の業と名付く、彼の仏の願に順するが故に。」の文章で目が開かれ、導かれて独自に専修念仏の道を発見しました。それは万人共通に平等に救われる道であり、自己探究の究極の道であります。

法然上人は全ての宗教に共通する教えを説いたのです。法然上人の念仏は善導大師の「観経疏」の言葉に始まり、一枚起請文の言葉に尽きると思います。一枚起請文は三百字足らずの文字であり、趣旨は「往生するぞ」と思いとりて、一文不知の愚鈍の身になして、「只一

向に念仏すべし」更に「只一向に念仏すべし」なのでありますが、この言葉のなかには法然上人が選んだ三經一論は勿論、釈迦の説法を集大成した五千余巻におよぶ大藏經が総括されていると徳川時代後期の嵯峨天竜寺の道倫禪師により指摘されております。また室町時代前期の大徳寺の一体禪師は一枚起請文を「法然生き如来」の言葉として受けとめております。然し、実際に法然念仏究極の真髓を体得するには「難中の難」と親鸞をしていわしめたように4〜5年は夢の如くに過ぎて行きます。

私も法然上人の一枚起請文と善導大師の觀經疏をもとに法然念仏を始めて5年目によりやく念仏の声が聞こえはじめ、以前に曹洞宗原田祖岳禪師の高弟伴鉄牛老師のもとで3年間にわたる参禪の結果、見性体験を許された時とは又別の心安らかな三昧の境地を体得しました。「三昧發得」として法然上人は念仏により三昧の境地を体得しておられます。しかしその境地を記録にとどめた「三昧發得記」は「外見におよばざれ。秘藏すべし」と公表を禁じておられるのです。また觀仏をも「觀法をなす勿れ、仏像を觀するとも、運慶・康慶が作りたる仏だにも、觀じあらわすべからず」、また一枚起請文にも「觀念の念にも非ず」と否定しておられます。これらは一体何を意味するのでしょうか。確かに私自身の体験では、禪の見性の時には一時間程度の短時間で、その境地は消え失せますが、それに対して初めての念仏三昧發得の場合には日課の称名ごとにその境地は再現され、これこそが極楽浄土であるとの感激もあり、法悦に満たされる日々が6ヶ月程度継続しましたが、やはり

その境地にも次第に慣れが生じ、感激がなくなります。またその状態の時はよいのですが、念仏以外の時には、やはり満たされないものが残るのです。また観法も結局、同じ結果になります。

実は念仏による「三昧発得」や「観仏」は法然念仏の究極ではなく、修行の過程にあたり、真の法然念仏はここから始まるのです。それは一枚起請文の「往生するぞ」と思ふこと」の中にその秘密が隠されていることに気がきました。南無阿弥陀仏と称えれば阿弥陀仏の本願力により往生することが間違いなく、ただの一声の例外もなく、誰が称えても平等に即実現するのです。従って、「絶対に何事も求めてはならない」。その求め心が浄土往來の妨げになるのです。悲しいときは悲しいままに、苦しい時は苦しいままに、一声、一声の南無阿弥陀仏に、只お任せして南無阿弥陀仏を称える。選択集冒頭にあるように我々は生まれながらにすべての者が、否すべての生きもの、山川草木に至るまで、全て仏性を持つている。それが自我による執着のために気付かないで暮らしているのです。南無阿弥陀仏と称えることにより阿弥陀仏の光明に照らされ、弥陀の本願の力により、弥陀に包摂され一体化して、一如となり、生れながらの仏性に目覚めさせられ、南無阿弥陀仏（行）が南無阿弥陀仏（行）する。自分と南無阿弥陀仏が一如となり、自分（自我）が念仏を称えているのではない世界、一切の計らいの無い世界、それが生死を越えた往生極楽の世界であり、「往生するぞ」と思ふこと」の真の意味であると体得しました。法然念仏は御恩

報謝の念仏ではありません。永い人生には何時も感謝の気持ちではおれません。また法然念仏にはその感謝の気持ちが妨げになります。一遍上人が法燈国師の前で「称ふれば仏も吾もなかりけり。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と心境を披露し、印可証明を受けたと言われておりますが、それは三昧の状態であるにしても念仏の究極ではなく、法然念仏はその南無阿弥陀仏をも意義することなく、「只一向に念仏すべし」であります。三昧も迷いも共に真実であります。それに捉われることなく、さらに、他に求めることなく、自我に捉われず、南無阿弥陀仏に包越されて今に徹して生きる。永年修行した修行僧も、今念仏を始めた無智のともがらもともに変わらず、一声、一声の念仏により平等に極楽往生が出来るのです。それは、もともと全てのものに仏性があり、南無阿弥陀仏によって、その自己の仏が仏行を行なっているからなのであります。法然念仏を体得しても雑念・妄想はなくありません。三昧も雑念妄想もともに往生極楽の風向なのです。それに捉われると、すべて三昧までも迷いとなります。勿論、迷いは迷いて嫌い捉われるべきでなく極楽の風向と心得、決して他に求めず、自我に捉われず、南無阿弥陀仏にすべてをまかせて、ただ称える名号の声に雑念妄想を載せて、念仏の声によって、揺れる心を引き締めながら、称える声を阿弥陀仏と心得て、只一向に念仏する。それが法然念仏の究極であると体得しました。浄土は自我を越え、静止を越えた世界であり、自我を満足させる世界ではありません。南無阿弥陀仏に包越された世界それが即浄土なのです。

雑念・妄想・苦しみ・悩み・自我とは絶対対立しないで一如となり、雑念・妄想・苦しみ・悩み・自我そのものの風となり、それが南無阿弥陀仏の風に包越され、全てと一緒に、只一向に、一如の風となつて吹く。その風がこの現実の世界を変え、生死を越えた、心安らかな浄土を現成させるのです。

さて現代は新たに多くの難問を抱えておりますが物質を中心とする科学万能と言われるまでに至っております。科学も宗教・哲学も共に真理を探究して、我々の人間としての生きがいを見出そうとしております。科学は物質を中心とし、宗教・哲学は精神・真理とはなにかの課題を中心にしております。然し共に真理の追求である点で一致しており、従つて真理は一つである。宗教は超宗教であり、科学は超宗教である面があるとしても、矛盾または相対立するものであつてはなりません。対立または矛盾しているとすればどれかに誤りがあるのです。互いに相い補うことこそが21世紀を生きぬくための使命だと思ひます。

法然上人の教えの中に阿弥陀如来、本願、本願の力、極楽浄土の言葉が出てきます。これらの言葉を科学の時代の現代に納得させる説明が必要であると考え、私なりに、体得したことを述べたいと思ひます。この世の中の全てのものは有形、無形の区別なく因縁果の法によつて生滅しているのです。われわれの身体も精神も同様です。そして全ての存在は、それ自信単独では実在せず、互いに関連しながら、因縁果の法により現象、働きとしてのみ実在しているのです。台風は温度による気圧の差という「因」と地球の自転という「縁」

のために発生した空氣の「渦巻現象」という「果」であり、したがって気圧差がなくなる
ともとの空氣（空）にもどるのと同じ現象なのです。

因縁果の法は空として表現されており、空はこちらの力の及ばない働き（無自性）である。その因縁果の法を因縁果の法たらしめ、さらに生きとし生けるものを因縁果の法に則りながら、慈悲と智慧によつて、一瞬の休みもなく、宇宙をそしてすべての生きとし生けるものを育て、形を維持させ、生かしている法がある。その法が阿弥陀如来であり、その実態は空であり、言葉で表現出来ない。しかし、我々はその働きは「おかげさま」と言う姿で実感することが出来る。また念仏による三昧により空の世界、法の世界を実感することが出来る。われわれはその働き（本願力）なしに、只の一瞬も生きることが出来ず、死ぬことも出来ない。しかし、何故そのような大きな全体他力（本願力）のなかに我々は生かされているのか。法（如来）は何故実在するのか。それは如何なる偉大な宗教家であろうとも、また偉大な科学者であろうとも永久に謎であります。釈迦もそれ以上考えるなど説いております。（無量壽經に法藏菩薩仏話が出ており、法藏菩薩が世自在王仏のもとで修行を重ね、阿弥陀仏になつたと説かれておりますが、世自在王仏や法藏菩薩が何故存在したのか、何時から存在したのかにはふれられておりません。更に漢訳無量壽經には、仏陀世尊が無量壽如来の寿命の、永遠にして思量すべからざるをお説きになつた經典となつております。）まさに「不思議」であり、法然上人も「義なきを義とし、様なきを様とす。」と

「護念經」の奥書に説いているのです。その我々の及ばないところからの呼びかける声に耳を傾け、その本源の願い（本願）に身を委ねて生きる。そこに真に人生の意義と今に生き、生命の充足感に満たされた真の幸福があるのです。我々は生れながらに仏性があり、その仏性が南無阿弥陀仏に包越されながら、阿弥陀仏と一緒に、任せきって、阿弥陀仏の慈悲と智慧に包まれながら、そのことにより心が安らぎ、一切の争いを止め、自分の仕事に自分の力を出し切って生きる。それが法然念仏の生死を越えた平等浄土（極楽）往生の姿であると体得しました。

最後に私が冒頭に述べました「法然念仏による称名超格思惟法」について述べたいと思います。私は如何にして創造性を發揮するか、今までになされている多くの創造性の研究を調べ、創造性について研究してきました。その結果、創造性は創造手法も或る程度必要ですが、結局は心の問題であるとの結論に至り、法然念仏により自己の心を整えることに専念し、新しい思惟法を見出しました。それは念仏により三昧の状態が実現出来ることが条件になります。今解決が迫られている問題は出来るかぎり、徹底的に理論的に追求します。また情報はすべて完全に理解し整理して、解決すべき問題点を明解にしておく。次にその解決すべき問題については一時中断して、意識的には、完全に問題意識を放棄し、忘却の状態で、一向に念仏を行じ三昧の状態にする。何かを期待するのではなく只、念仏に専念する。しばらくすると何の前触れもなくその解決すべき問題に関する、全く新しい創

造的発想が自然に湧いて来るのです。発想が湧いて来ても、それをそのままにして、無意識的に自我の意識を交えないで、湧くがままにして念仏行を行ずるのです。すると浮かんだ発想が流れるように展開して生きます。ここで自我の意義を働かせると即消失し、それ以上発展しなくなります。これが通常5〜10分間程度継続し、自然に止みますが、絶対に自意識を働かせないで、消失のままにします。発想が忘れる心配のある場合にはすばやくメモをとります。討論中でもこの方法による解決が必要であれば、その状態で思考を一時放棄し、絶対解決を求めないで楽な姿勢でそのまま只念仏を行ずる。人の前等の場合では息を静め、三昧に入るだけでもよいのです。全く新しい解決のヒントが得られます。日課としている念仏の時にも日頃の解決すべき問題について突然ヒントが湧いて来る場合があります。その場合は、それを大切にして上に述べた方法により育て上げるのです。一定の時間の念仏三昧の行を解いた後、得られた発想を記録にとどめるのです。この方法を法然念仏による称名超格思惟法」と名付けております。思惟法として工学禪も提案されておりますが、禪は一つの公案または「不思量底を思量する」状態で坐禪を行じ、精神統一をしている為、定善と言われているように坐禪中に全く別の発想が突然出て来ることは困難であり、出て来てもそれを育てることはしないのです。それに対して念仏は散善と言われているように念仏で三昧になりながら他の作業が出来るのです。また他の作業をしながら、念仏で三昧になれるのです。そこに「法然念仏による称名超格思惟法」の特徴があります。

「何故超格思惟なのか」それは法然念仏思惟は全人格体が法に包越され、法・自一如の状態での知識を越えた思惟であるからであります。

今、日本が、そして世界が物質中心の科学文明、計量文明に限界を感じ、21世紀に向けて科学技術に於いても心を中心とした方向を模索しております。創造性の分野での日本の世界に対する責任が問われております。また家庭において、学校において、社会において精神の問題が問われております。それらに対して法然念仏は真の解決を与えるものであり、今ほど日本に於いて、そして世界に於いて法然上人の念仏が問われている時代はないと思えます。

(東北大学教授・理学博士)

連載

魅せられて映画に〈私流映画講座II〉

丸林久信

嗚呼

助監督

!

一九四一年（昭和十六年）一月、私は京都騎兵第二十連隊に入営した。中隊長から職業を聞かれ、躊躇なく「自分は東宝撮影所の助監督でありました」と答えた。と、中隊長は

厳しい顔つきになり、声を荒げ「なにッ、ジヨカントクだとノ」聞くのも汚らしいとばかりに怒鳴ったのである。そして、その日から私はビンタ（鉄拳制裁）の洗礼を受け、幹部候補生も落される始末だった。中隊長はジヨカントクを女優の宿舍の舎監と誤解したのである。従ってヤキをいれたのだということの後になって判ったが、このときはどジヨカントクの職業を恨んだことはなかったのだ。た。

前年二月、東宝の助監督として入社。

「これから一所懸命に勉強して……」

「ちよつと待ち給え（所長が手で制した）」

撮影所は学校ではないよ。勉強したいなら月謝を下さい。助監督の仕事はそんな甘いもんじゃありません。御自分の好きなことをなさ

って《月給》^{ゼツキョウ}を貰うのですから、その積りで働いて下さい。」

のっけから所長に威かされたのである。

助監督（演出助手）。主として監督が演出する仕事をしやすいように手足となって動くひとたちです。第一助手（チーフ）、第二助手、第三助手（セカンド・サード）の三人で、チームを組みますが、作品によっては五人ぐらいつくことがあります。

チーフは主として監督の演出上の手助けと制作部との調整に当たり、現場のあらゆる部分に目を光らせ、ミスのないように気を配り、撮影スケジュール（予定）を組み、場面割、^{こうばん}香盤、^{こうばん}テッパリ表をつくるのも仕事のうちです。セカンド以下はチーフを助け、現場でエ

キストラの群像の動きの指示、俳優の出番の^{でばん}テッパリ

テッパリ

（演技者が他の作品にも出演（配役一覽表、演技者の登場していてダブルことをテッパリ表のこと、劇場の座席表のこと）という。こうした演技者のともいう。調整をはかるための一覽表をテッパリ表という。

連絡、セットの調度品の配置、子役のお守り、見物客の整理など、数え上げればきりのない雑用に追われるのです。



①正門 ②会議室 ③事務室 ④ステージ
⑤映写室、ダビング・ルーム ⑥オープン・セット

セットから俳優部屋、衣裳、小道具、床山、結髪と撮影所内を飛び歩く里程は、一日に三、四里（十二〜十六軒）はくだらないでしょう。

「助監督とは走ることとみつたり」とに

かく広い撮影所を走るのが仕事ですから大変。
新米助監督はチーフに怒鳴られ、古顔のス
タッフや俳優にはイビリられ、泣くに泣けない
日々を送り、おまけにセットやロケの現場で
はカチンコを打たなければなりません。「カチ
ンコ三年、走り三年」一人前の助監督になる
のも並大抵ではありません。

撮影所を、「夢の工場」などとはよく言った
ものだと愚痴をこぼしながら、とにかく、走
った、走った、走ったものでした。

カチンコ

(小さい黒板の上に、二本のこの名がある。
拍子木を取りつけたもの。一 黒板に記入されるシーン、
方を支点にして、カメラが回 カット、トラックナンバーな
りはじめたとき、レンズの前とは編集のときの手がかりと
でカチンと打ち合わせるのになります)

嗚呼、助監督助監督……こんな仕事なんか
辞めてしまえ！ ヤケのヤンパチなんどもそ
んなふう考えたことか。

いまは故人になられた山本嘉次郎監督の作



復員直後の昭和25年、「燃ゆる牢獄」で助監督とし
てカチンコを打ち合わせる著者。(右は市川春代)

品「ホープさん(小林桂樹・高千穂ひづる他)
の水上温泉のロケーションのときのこととし
たが、東京からこの土地に転動してくるホー
プさんに乗せた汽車が、この水上駅に来ると
いう設定でドラマは進められていました。

町長、駅長、町の顔役たちを演ずる俳優たちで、あわたたしく駅前撮影を行い、あとは、ホームで町全体をあげての、ホープさんを熱烈歓迎をする場面だけとなったのです。

セカンド、サード助監督はエキストラに動員された町のひとびと、老若男女、小・中学生たち、それぞれの風格に応じた演技をつけ、なんどもリハーサルを行い、また、なんとか格好をつけ、ホームの所定の位置に並べることが出来ました。もう、いつ汽車が到着しても大丈夫、スタッフ、俳優ともに用意万端、OKの態勢が整いました。

時刻表どおりに汽車が姿をみせました。カメラがまわり、ひとびとはどよめきました。エキストラの町のひといい芝居をしてれています。汽車がホームに停まり、主人公ホープさんはニコヤカに手を振って……、が、私は思わず息を吞んで、それこそ弁慶の立ち往生。と、同時に衣裳係の女の子と、小道具さん「ああっ！」と悲痛な声をあげました。

ホープさん、ニコヤカどころか苦虫をつぶしたような顔で叫びました。

「丸さん、どうなってんのさ!!」

ホープさん小林桂樹氏、発車時刻にあわせて、上野駅で衣裳替えをして小道具を貰うことになっていたのだが、撮影所から係の者が誰も来ない。仕方なく汽車に乗ったということだった。衣裳と小道具さんに聞いてみると、手違いで肝心の衣裳も道具も、行李にいでて、こちらに持ってきているのだ。

こうなったら、撮り直そうということになったが、上り列車が来るのはあと二時間後、この先の駅まで行つて、もう一度、下り列車を待つと夜になってしまうのである。さっき駅前で撮影した町長の演説や芸者（藤間紫）の芝居は真つ昼間の芝居であるから、どう考えても話がつながらなくなる。そこでホームの芝居は明日にしたが、これが大変なのである。まず水上駅との時間変更の打ち合わせ、撮影後すぐ東京に帰って、他の組に出なくてはな

らない俳優を引きとめるためのテッパリのスケジュール調整、エキストラの人数の変更、明日の弁当の手配り、撮影時間、撮影場面の変更などなど、とにかく目の回るような大騒ぎでした。

さて、やっとすべての準備が整い、助監督一同はつとしたのもつかのま、その真夜中、不意に半鐘の音で目が覚めました。水上駅が火事となり、旅館の窓から赤い炎がみえるではありませんか。駅には明日の撮影のための機材や小道具があずけてありました。目の前が暗くなりました。機材、小道具は取り寄せることが出来ても肝心の駅が焼けたのではどうしようもありません。もし衣裳が、小道具が、もし、チーフである私がロケ出発前にもういちど点検していたらこんなことにならずに、その日のうちにホームや駅関係のシーンの撮影は終わっていたはず、もし駅が焼けていなければ……もしと悔み、はずだといってみたところで、どうにもならないのが撮影な

のです。

こうなったら、勝手を知っている新潟に話の場所を変えようという監督の発案で、新潟に行くことになりました。ところが運の悪いときは悪いもので、先発の私たちが新潟に着いて、しばらくするとまたもや駅が火事になりました。やむを得ず、東京に戻り次善の作を練ることにしましたが、撮影予定の大幅な変更でとにかく大変でした。テンヤワシヤのうちにこの作品はめでたく(?)撮り終りましたが、こうなつたのも元はといえばチーフ助監督の私の不注意が原因だったのです。

もしとかはす、後悔は先に立たずです。仕事というものは、念には念をいれても、ちょっとした不注意で、とんでもないことになるのだと、身を以て教えられたことでした。

これも、山本監督の「坊っちゃん社員」(小林桂樹・藤間紫他)のときでした。製作部で今後の仕事のスケジュール調整をしているとき、セカンドの助監督が血相変えてやってき

ました。

段取りが整ったのに、監督がいつこうに腰をあげようとなないので、スタッフも俳優もお手上げの状態だと言うのである。

そこで、セットに行ってみました。宿屋のセットの壁に向って、ヤマさん（私たちは山本監督をこう呼んでいたのです）はチョークで《悪戯書》^{いたずらが}きをしていながら、無言の行でした。

セットは新潟の旅館です。坊っちゃんはこの泊って、明日は佐渡に行くことになっているのです。（ははん、ヤマさん拗ねてるな）そう思った私は、小道具さんに言いつけて、佐渡行きの汽船の時刻表の入ったポスターを作らせたのです。やがて出来上がってきたポスターをビンで壁にとめました。ヤマさんの悪戯書きの絵がすっぱりとかくれました。ニヤッと微笑ったヤマさんはようやく腰をあげました。

監督はいまなにを考えているのか、どうし

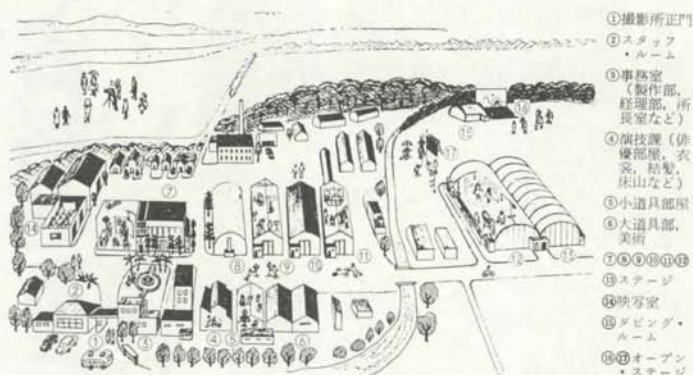
て欲しいのか、それを見抜いて先手を打つのも助監督の仕事のうちです。これは別に助監督だけでなく、普通の社会でも言えることではないでしょうか。

ひとのころを讀みとる、期待に応える、いつけんむづかしそうですが、そのひとの身になり、自分に置きかえてみることで、なんとなく解決する。そんな気がするのです。

撮影所は夢の工場。いまになってみると、これは嘘ではないとおもうのです。助監督の夢は監督になること。工場は私自身のこと。工場は稼働してなければ意味がありません。前述の所長の言葉「好きなこととしてギヤを貫う」職業。どんなにつらく苦しい時があっても、常に監督になる夢を追って自らを充電し、稼働させる。いま、私は思います。あの助監督のときの修業（？）を考えれば、なんでも出来ないことはないのだと――。

（元東宝映画助監督）

——参考文献——拙著『映画製作ハンドブック』黎明書房



井上春樹

外国で
生活して
⑤



ドジャースタジアム



ダウンタウン遠景

異国で資格を取るの
は難しい
涙とペーソスの
ドタバタ喜劇

L.A.

「はい胸はってーそう男らしく胸はってー肩の力抜いてー遠くを見てーガス踏んでー前には邪魔するものは無いぞ、よし俺が車を使うんだ、こいつめ俺の言うことを聞け！そんな気持ちでやりなさい」

李さんが隣でしゃべり続ける。本当によくしゃべる人だ。切れ目がない。聞かされる身にもなって欲しい。

「信号は何ですか？（赤だ）どうして早めにブレーキに触らないのでしょうか？信号は気持ちを着かせてくれます。ああ赤信号で良かったそんな気持ちで止めなさい。飛行機が降りる所、何と言いますかそう滑走路。ユーはパイロットです。今滑走路に降りると思いません。信号が見えたら、ブレーキに触って見なさい。どこで強く踏むべきですか？一度強く踏んでまた少しづつ離せばいいでしょ。急に止めると飛行機はどうなりますか、頭が滑走路にぶつかるでしょ？そう上手だ。滑るようになめらかに静に止めます。80点、合格

だ。これなら試験官が安心します。この生徒はブレーキの使い方良く判っているなそう思われます。NO、どうしてガスを踏みますか？見なさい乞食（ロサンゼルス名物のホームレスだ）が横切るでしょ。信号が青に変わっても左右をよく見てから、ゆっくり動けばいいでしょ。あわててはいけません」

4月にロサンゼルスに着くと運転のインストラクターとして韓国人の李さんが現れた。

「私は沢山日本人を教えました。ユーの会社のAさんもAさんの奥さんも娘さんもみんな教えました。他の先生についてもどうしても合格しないなんとかしてくれ、そういう人も私が教えたらすぐ合格しました。ユーも大丈夫」本当にそうだといいな。

筆記試験はあっけなくパスした。こんなもんかとなめたのがいけなかったのだろうか、うんざりするほど長い練習が始まった。助手席にガスとブレーキペダルの予備をつけた李さんのホンダで毎日2時間出社の前にコリアン

タウンへ向かう。ロス暴動で襲われた韓国人商店主がピストルで反撃していたあの町並みだ。にぎやかな表通りを抜けて道を横に入ると、静かな住宅街がある。

「私はよくここで練習をやります。ここはとても良いところです。人通りが少なくて見通しが良い。見なさいあの車も生徒です。あんなお婆さんでも運転できます。ユーなら10日間でOKでしょ」

李さんの予測は見事にはずれた。最初のテストでは、オーバーラン、後方確認漏れ、急停止など、やってはならないことを全部やってしまい、点数さえ貰えなかった。(百点満点の減点法。70点を越えれば合格となる)

試験官に言われた。「練習が足りない。もう少し時間をかけてまた来なさい」

李さんに話すとこんな返事だ。

「ユーの歳を間違えました。ユーは若く見えるので、これなら早く覚えるなと思って試験の予約を入れました。私が勘違いでした」

ああそうですか。だけど若く見られても嬉しくない。念を押しておこう。

「私は47才です。日本で運転したこともありません。友達からお前は運動神経も無いし、人の倍かかるぞと脅かされてきました。そのつもりでお願いします」

李さんの正確な年齢は、いまだに判らない。「私は軍人でした。少将まで行きました。これが若い頃の写真です」見せてくれた写真の背景には皇居が写っている。

「日本の軍隊にいました。北の奴等とも戦いました。兵隊の教え方がうまいと言われて戦争の後も教官をやりました」

朝鮮戦争を経験しているとしたらゆうに65は過ぎてるはずだ。韓国人で時々出合うタイプだがとにかく自信満々、ロスの日本人駐在員の運転免許はすべて自分が取らせたと言わんばかりの迫力だ。たしかに、教え方は上手なのだろう。こちらが理解するまでいろいろな例え話で説明してくれる。

「ちよっと下品かもしれないが、私はこんなこと考えました。ユーは女性のちぶさ、わかりますか?」「ちちぶさってなんですか?ああ乳房ですか。ちぶさ、おっぱいのことですよ?」「そう、ちぶさ。私は時々日本語がおかしくなります。もしユーが女性のそこに触る時ギョツと握ったら何と言いますか?」「痛がるということですか?」「そうです。優しくそーっと握るべきです。車のハンドルも同じです。ユーはさっき手に汗が出たといったでしょ。強く握り過ぎてるからです。力をぬいて手首をブラブラさせる感じでチョコチョコ切りなさい。そうチョコチョコ。そうですそうすれば女性が喜ぶでしょ」横目で李さんを見ると自分の例え話に照れたのか外を見ている。

「ユーに何度も言いました。ブレーキが基本です。椅子にさわっている背中で感覚を覚えなさい。手が運転するのではないのです。体が運転します。目の前に水を入れたコップがあると思いなさい。乱暴に止めたら水がこぼ

れてしまふでしょ?そうです水をこぼさないようにそおーっと止めなさい」

説明を工夫して熱心に教えてくれる。なるほどと思うのだが、同じ間違いを繰り返すとしつこくお説教されて辟易する。特に交通规则にはうるさい。この人の部下だった兵隊さんはさぞかし苦労したろう。日本の教習所はどうなのか。意地悪な教官はいららしいが、こんなに口やかましいのだろうか。

家族の話はあまりしない。だがサンフランシスコの大学に通う息子さんがいるらしい。

「英語ばかり使って韓国語忘れます。こまったもんです。何をしたいのかも判らない」

軍隊を退役してから何故アメリカに來たのか判らない。そういえば自分の故郷の自慢話をしない。「北」の出身で帰る場所がないのかもしれない。この国は確かベトナム戦争につきあったお返しに、韓国からの移民枠を増やしたそうだがその時に渡ったのだろうか?

2回目も失敗。まだ点数を貰えない。

「どうしてか判らない。ユーにはもう教えること無いのです。ユーは車の多いダウンタウンも何回も上手に走りました。試験になるとあがつてしまつて失敗する。不思議だ。普通ならとうに受かるはずだが」「普通じゃない人もいるんですよ」思わず逆らつてしまふ。練習を増やせば支払う授業料(2時間\$60)も増える。会社は運転免許の援助はしてくれない。何とか早く終わらせたいと焦る。

ケンカになつて「もう教えない」と言われると困るので工夫が必要だ。以前ハングルをかじつたこと、韓国映画のビデオをアメリカまで持ってきた話など持ち出して、友好関係の維持に務める。

「ほうユーは感心だ。韓国に興味がありますか。本当に感心です」

相手が話題を持ち出すこともある。

「ユーは昨日のニュース見ましたか?」「韓国のガス爆発のことですか?」「そう、大邸です。若い人が沢山死にました。政治が悪いで

す」「日本も地下鉄サリン事件で大騒ぎですよ」「そうですこの国も大変です。アメリカもオクラホマが大変です」

悲惨な話題のわりにのんびりした時間が流れる。しばしの休戦期間だ。だが練習を再開するとたちまち取りつく島のないタフ・ティーチャーに戻つてしまふ。出来の悪い生徒にはますます闘士が湧くのだらう。

3回目が悪悪だった。試験場を出て一般道路に向かうはずなのに、試験官は戻れと言う。「また来なさい」「どこがいけなかったのでしょうか?」「出口のところで、赤信号が点滅していたら。その時は一旦停止して安全を確認してから発進する。基本が判つていなければ、その後をやつても意味がないよ」

おそれいました。なるほど出口の信号を見落として一時停止しなかった。筆記試験をパスして実技を受けられるのは3回まで。もう一度振出しに戻つてしまった。

こうなると、世話になつてゐるホテルのフ

ロントマンにもテストの結果を報告するのが恥ずかしい。最初の頃は「今日はテストだ。頑張るぞ!」「きつと受かるよ、グッドラック!」意気揚々と出てきたのだが。

「私はこんなことを考えました。縁起をかつくのではないが、次からは人に話すのはやめなさい。どうもそれがよくないようだ」李さんがあきれたように言った。こちらもお小言は聞き飽きたし、李さんも話すネタが切れてきてお互いに途方にくれる。

車が無いとヤオハンに日本食の買い出しにも行けないロス駐在員の課題は、運転免許―家探し―家族呼び寄せという順番だ。第一関門で足踏状態ではこの先どうなるのか。

試験場にテストを終えた車が帰ってくる。なるほどいろんな人種がいる。台湾人のおばさんや、アルメニア人のギャルが嬉しそうに、指紋を取ってもらい写真を写す。目をうるませている人もいる。あの人も何度か落ちたのだろうか。

4 回目のテストでやっと明かりが見えた。

黒人の試験官に「おお日本人か。東京オリンピックの年に日本へ言ったよ」などと話しかけられ「円安になったら、また遊びに行って下さい」と軽口をたたいてリラックスしたせいだろう。点数は62。車線変更で後ろを十分振り返らなかつたことだけ減点。あと8点だ。そして5回目。初めて女性の試験官だ。「ユーの試験官が女性だったら、こわがらせてはいけません。女性には乱暴な運転をされると印象が悪くします」もつともな李さんのアドバイスだ。かなりのボインちゃんだったが、ちびぶさの話を思い出す余裕は無い。

テストはあつてなく終わった。彼女が何か行っている。こんな時に限って聞き取れない。おそるおそる書類を見せてもらう。「得点92パス」おやったか。李さんが寄ってくる。「パスしたね。遠くから見ていても判りました。OK。良かった良かった」親指の指紋を取られる。写真を撮られる。署名をする手が震え

ている。

帰り道の車で、しみじみ李さんが言った。

「途中から私はこんなこと考えました。ユーのような生徒は2年に一人くらいかな。でも何とか5回ぐらいで受かるような気がしました(本当かな) ユーは基本を沢山やったからきつと安全運転します。私は生徒の合格ほど嬉しいことではないです」

会社の人も心配していたらしい。アメリカの社内報に「運転免許挑戦／最多記録保持者」という面目記事を書かれてしまった。

最初の筆記試験を受けたのが4月17日、実技テストパスは6月6日。熱心だが恐ろしい先生との2ヶ月のお付き合いは終わった。支払った授業料は書きたくない。

もう秋だ。「テストに合格したら焼肉屋で御馳走します」と約束していたのに、仕事が急に動き始めてまだ李さんに連絡していない。車でハンガルの看板が溢れる街を過ぎる度に李さんを思い出す。

仕事で韓国に出張したことはあるが、せいぜい2〜3日の滞在だ。駆け足で訪問したオフィスや町並みの印象を「日本より10年は遅れてる」と同僚に話した記憶がある。韓国が日本を追いかけているのであり、日本が韓国から学ぶものは無いと思っていた。簡単な韓国語以外に自分が韓国の人から何かを学んだのは初めての経験だった。それが日本でも韓国でも無く、ここロサンゼルスだったこと。思えば不思議な巡り合わせをしたものだ。

今度李さんにあつたら、何の話をしようか。ロスでの生活では大先輩の李さんから、車の運転の他にも教えて貰うことがあるはずなのだ。

いのうえはるき 詩人
1948年生
芝高・慶応大を経て
JTB入社
現在ロサンゼルスに在住

早いものです。本年も、わずかにひと月を残すのみとなつてしまいました。皆さんご自身にとつてはいかがでしたか。充実した一年でしたか。

振り返ってみますと、今年も本当に慌ただしく過ぎ去つたものだと感じないわけにはいきません。(年々そのスピードが増してきているように思うのは私ひとり?) 忙しい、忙しいとボヤキながら日々を送り、諸事に振り回されて、時には自分を見失つてしまひそうになつたこともありましたが、何かに追われているような感じすら覚え、気がついてみたら、今年もまた師走を迎えていました。

日々の生活の中で、自分自身と真正面から向き合い、心静か

若和尚の

九 其 し な は い い ト ツ ヨ チ

にじつと見つめるといったことは、なかなか出来ないのです。いえ、出来ないのではなく、しようとしただけかもしれない。「流される」と安易に受け身的な表現をしてしまいがちですが、実は自分から「流れている」ことも少なくはありません。また、自分を見失うということの原因もこのあたりと関係がありそうです。人生というドラマの主人公は他でもなくこの自分であり、その主人公が自身のことをよくつかめず、いつもフワフワとしていたのでは何とも締まりのないドラマになつてしまいます。この時期に来て、反省すべきことの多さに、あらためて気づかされます。

善導大師の「往生礼讃」の中

の「初夜礼讃」に、

煩惱深無底 生死海無辺

度苦船未立 云何楽睡眠

勇猛勤精進 摂心常在禪

という偈文があります。「煩惱は底知れず深く、生死の海には辺(ほと)りが無い。この苦しみ多い海を度(わた)る船はいまだ出発せず、どうしてそのような世界にいて安々と眠ることなどができようか。常に心静かに摂(ととの)えるよう務め励むことが大事である」

「師走」というが如く、この一カ月はいつも増した速さで過ぎ去つてしまいかねません。そんな時だからこそ、心を落ち着かせる時間を設けて、残された平成七年を大切に、有意義に過ごしたいものです。(正)

表紙は語る
共に生きる
ブナ原生林から

●
本紙表紙写真／文
御所野洋幸

◆
最終回

森は水を貯え、土壌を作る。

地球温暖化の原因になっている二酸化炭素を吸収し、鳥獣を育て、プランクトンや虫の育成まで行い、結果的には魚類も保護している。

その森の働きの要、それがブナの原生林なのだ。

樹齢150年のブナ1本で、約8トンの水を貯え、ヘクタールあたり年間10トン近い葉を落とすという。

雨が地表を走ることさえ抑えて洪水を防ぐブナ。果実は鳥獣を養い、落葉は土を肥やし、山菜や他の野草を育てるブナ。森の母、森の医者と呼ばれるブナ。そのブナと共に生き、写真を撮り続けるひとりの写真家がいる。

一年をふり返る

根雪になってまだ日が浅いのにもう五十センチ程の積雪だ。空はグレー一色で風もない。何時やむともわからない雪がひらひらと舞い降りている。ちょっと湿りのある雪だ。耳をすますと微かにサラサラサラと雪の積もる音だけが続いている。あたり一面真白のキャンバスだ。そのキャンバスの上を野ウサギと山鳥が動き回った足跡と草木とのバランスもよく心楽しい一枚の絵になっている。先月はなにか物悲しく見えた木々は完全に深い眠りに入っている。

雪は一年中の楽しい事も悲しい事も真白に塗り潰し、吸収しそして総てを過去形にしてしまふ又純白の雪に何もかも清められているような気がしてならない。私の都合のよい発

想である。寒い冬が終り雪解けに路の臺が顔を出し土の香りがして木々が芽吹きを始める。と私の新しい年が始まる。ものぐさの私が活発に動き回るのは、雪解けから雪の降り始めまでである。

私がブナの原生林を撮り始めたのは、八年前に全身がふるえるほどの美しいブナ林の紅葉に会ってからだが撮り始めて今年で七年になるがまだあの美しさに会っていない。聞くところによると、紅葉が本当に美しいのは七年に一度又は十年に一度と言われている。それも二、三日で終るという。しかし四季を通して林の中に入りその都度多くの喜びや感動をうけている。姿や形、色の美しさ以上に美しいものを数多く知ることが出来たその喜びは私をブナ林から離れられないものにしてしまった。そして年年その思いが深いものになっている。しかし東京で生活している私が山に入れるのは年に六、八回が限度でそれも一回が約一週間である。



林の中は葉芽も花芽も堅いコートを着て白い雪を被り深い眠りについている。この林での出来事が思い出される。

二月には吹雪で山に入らず国民宿舎『森吉山荘』の近くで病氣のカモシカを保護したが、悲しそうな目と重い体、山の動物の温もりを私の中に残して翌日死んだ悲しい思い出。

三月には体力の過信、カメラ装備と食糧

気持だけが先ばり冬山に一人で入山し疲労困憊になり自分の体力の限界と愚かさを知った。四月には熊とのニラメッコで恐しくて身体が固って動くことが出来なかった。私の一番好きな季節になった五月には、春紅葉の林の美しさ、一面が水芭蕉の花その真中に枯れたブナの木、美しい景観と食物連鎖、物質循環を目のあたりにして、まさに共生と感動し一日中枯れたブナの側にいた。六月には森の医者、森の母と呼ばれているブナの木の母「オバチャンの木」に会えたうれしさと山の幸に恵まれちよつとだけ山の生物の一員にな

れたような気がしたり、七月にはズダヤクシユの撮影中に霧が出て来てセミの鳴き声が止まり、幻想的になった林の中で、パラパラパと心地よい樹雨。八月には夏休みのキャンパーと焚火を囲み、岩魚の話、山の話、そして歌をうたい満点の星空の下でいつまでも酒を酌み合った。十月には台風十九号で撮影予定のブナが倒れ、木の葉は塩害で茶色になり美しい紅葉がほど遠いものになりどしゃぶりの雨の林を五時間もただ歩き廻っていた事など色々の出来事があった。

森の草木は春になれば一斉に目を覚しそれぞれが美しい緑を見せてくれる草木は毎年同じ営みを繰り返しているにすぎないが、私にはこの上なくうれしく、美しく思えてくる。

一本一本の木がそれぞれ友人、知人に見える木に話しかけ歩き廻るこの頃、多くのことを学ばせてくれたブナ林をして「オバチャンの木」この撮影に協力してくれた多くのの人々から感謝いたします。

合掌



特集 阪神大震災

今問う 僧侶にとっての ボランティア 川副春海

友人と仏教についての雑誌を発行している。教化誌でもないし、理論誌でもない。私たちが生きるこの時代の仏教を、合わせ鏡で背中を見えるように、照らし出す雑誌を作りたいなと、思いながら、作業を続けている。この十月、新しい号が出た。

これまでの特集は、お寺の〈経済〉を考える「お布施の経済学」、明治期以来の僧侶の妻帯・寺族の問題を扱う「寺の子コネクション」など。今回は阪神大震災の仏教者の救援活動を取り上げた。元来、被虐的な性格なのか、お寺、僧侶に対するネガティブな論評には、敏感に反応するたちだ。雑誌の切り口にもそれが如実に現れた。お布施の経済を扱ったときには「現代の説法上、お布施はアングラマネーに分類される」という学説にきちんときて特集をしたようなものだ。また「出家」の妻帯を考えたときも、歴史的にはネガティブであろうとも、われわれの時代にもっと寺族（僧侶の家族）を積極的に評価できないか

という視点だった。

さて最新号は大震災の特集である。倒壊した神戸の街を、僧侶の一人として、ヘボランティアの一人として、うろついた。現場でわずかな時間だったが、与えられた仕事は「お話ボランティア」。被災者の心のケアをするという作業だ。瓦礫の街と混乱する避難所、ある避難所で作業に従事する。目の前を行き交う「絶望と欲望、それに善意と偽善」、さまざまな意図に茫然となりつつ、所与の仕事をした。一人の僧として、何ができたのかと思う。被災者の話を聞くのに、あたかもカウンセラのような気で対していたのではないか。白衣を着てさっそうと歩く医師やセラピストら専門職をまふしげに眺めていただけではないか。心のケアと称して、ただあたふたしながら世間話をしただけではないか。殺人的な大地の震動で、身も心もずたずたになった被災者のこころの地平まで、宗教者として迫り得たか。夜、満員のバスでわずか開通していた





芦屋の駅まで戻りつつそう思った。

ここにも〈聖と俗〉のせめぎ合いがあるのではないかと思う。寺院経済が、完全に貨幣経済にのみこまれ布施という意味が見失われたと同じように、また僧侶の妻帯が一般化し、出家者であると共に一家の家長でなくてはならないどうしようもない矛盾があると同じように、ここにもそんな対立項が潜んでいるのではと思う。僧侶としての救援活動はどうあるべきか。僧衣を脱ぎ捨て市民的な救援をする事でよしとすべきか否か。実はそこに、市民的ボランティアと仏教のいう慈悲の実践の今風な対立、無自覚的な混在があるのではないか。

しかしまた、逆に仏教者の固有な救援活動にそうまで固執しなくてもいいのではないか、日本の仏教は八百万の神々と共生し、またそれぞれの時代の社会規範を認め仏教倫理を声高に押しつけたりはしなかったではないか、そんな思いも一瞬よぎる。



編集に際して強固な指針もなく、思いはあれこれとうつろつた。だが、それでもなおかつ出家の「ボランティア」とは、仏教者の出世間的価値と現代の市民社会の価値が対決し、そのぎりぎりの緊張関係の中で、生まれてくるのではないかと思う。市民社会からこぼれてしまう非日常的なものに、改めて光を当てる救援活動があつてしかるべきではないか。

ふと、僧侶として、この救援活動の中でも「極楽往生」の本義に立ち戻らなければならなかったのではないかと思う。自然の暴力的な力で一瞬のうちに失われた五千以上の命、横死した人々の真の往生を願うところ、われわれ浄土の教えを生きる念仏者の本義ではないのかと思う。あの混乱の中で実に困難なことではあるが、それでもそうあるべきではなかったか、と思う。

貴重な体験 平尾弘泉

一月十七日、テレビに映し出される焼け跡に立ち尽くす人々の姿、傷の手当もされぬままふるえている老婆の姿を見て、「ああ、あのおばあちゃんの背中をさすってあげよう、そのくらいのことなら、私にもできる」と思いたったのでした。

最初はAMDA（アジア医師連絡協議会）を通して、長田区に入り、避難所を回っているうち、以前から知っていた高野山の大和永乗さんと出会いました。大和さんの「被災者が今一番望んでいることはあたたかい風呂にゆっくり入ることだというから、風呂と畳を敷いてつくろげる休憩所を造ろうと思っている」という話に私も賛同して、以後、六月末までの間に月二、三回述べ五十日間、車で通いつめました。

山口からは私達の友人でもある、曹洞宗の方が一か月きてくれて、廃材を使って、立派な休憩所を建てました。どのボランティア団体にも属さず、教団としては行動しない各宗



のはぐれ坊主らがボツボツ手伝ってくれるようにもなりました。

「生きててよかった。自殺を思いとどまった。」ボランティアがどんどん帰っていく中で、ここにくると変らず、いてくれる。もうひとがんばりしようという気になる」と、ただお風呂に入って、お茶を飲む、それだけのことなのに人々は人間らしさをとり戻り、再生の活力を得ていかれるのです。

お世話をしている私達も毎日が『如是我聞』です。極限の状態を生き抜いた人々の話は、どれだけの経典をむさぼり読んでも知ることのできない貴重なものです。

結局、お風呂を作らせていただいていた長田神社が六月いっぱいに出ていかないと、ブルドーザーで壊すとまでいつてきたために退去せざるを得なくなりました。

長田神社の前は番街という西日本最大の被差別部落があり、その人達が風呂を手伝ってくれたり、出入りすること、区画整理に反





対する住民を扇動しているかのように見られていたことが、追い出しの原因らしいのです。

中世紀、戦乱や飢饉のある度、苦しむ民衆に施湯をして傷の手当をしたり、施粥をした乞食僧、それが時衆です。いわば、ボランテニアのはしりです。重税に苦しむ村があれば一揆の先頭にたったかもしれない。あくまでも民衆の中にいて、民衆の側に立つて行動を起した私度僧達が中世にはいました。

僧衣を着て、被災者に高座から法話をするような活動では、被災者は受け入れてはくれないのではないのでしょうか。



平成七年一月十七日午前五時四十六分。言句に尽くせぬ大地震。亡くなられた方約六千人。今なお仮設住宅などでの孤独死が後を断たない。にもかかわらず、日本のマスコミ報道はオウム真理教に時間を費やしている。幸いにここに紙面をお借りして、今の神戸の様子を報告して、復興の一助としたい。

その前に、東灘区西福寺住職伊藤省三上人が、この震災でお浄土へと旅立たれた。本葬儀の中、奥方様、お子様方の涙に共に涙し、残念の一語の極でした。上人は、兵庫教区浄土宗児童教化連盟の前理事長として大活躍された方で、私ども仏教徒会のメンバーでもあり、後輩の育成にも力を注がれた方でありました。ご冥福をお祈り申しあげます。

さて、神戸の町は瀬戸内海と、六甲山系の山々とに囲まれた、非常に住みやすい土地であります。六甲山系の山々は、火山活動で隆起した山ではなく、地下断層の圧力により、隆起した山であります。ですから、圧縮

阪神・淡路大震災 被害者からのメッセージ 明石和成



によって山はかたい岩石へと変化し、また水の道は自然とその岩石をはずれ下へと流れ、神戸の地形をささえてきました。

震源地は、淡路沖であります。地震による家屋の倒壊の被害者は主に、灘区、東灘区、芦屋市浜、西宮市浜と、市街地に多いのは、一回目に直接当たり、今度は、西の方から来たものが一たん六甲山系のかたい岩石にはねかえって、弱い地盤の海岸沿いに広がっていったものと思われます。

震度七という直下型の大地震は、多くの犠牲者とともに、生き残った被害者の人生をも変えてしまいました。日本は地震国であるということをおぼろげに思い、考えさせられました。

昔から、「地震・雷・火事・おやじ」と口癖のように恐ろしいものを並べあげていますが、その第一番目に地震を上げている意味をよさに体験いたしました。兵庫区、長田区では、火災により多くの犠牲者が出、生存して



いることがわかりながらも、手が出せずに火煙に包まれないから、涙いたしました。

あの時から一年が経過するのを前に、考えてみたいと思います。

地震直後のあの混乱の中で、私たちは気持ちを一つにして、誰もが「生きる」ことに精一杯でありました。救援された人も、した人も互いに捨て切れぬ記憶を持っています。この大地震がもたらした被害の大きさは、多くの犠牲者とともに、現に生き残った被害者の人生をも変えようとしています。神戸の町で保たれた秩序や平安、暮しのリズムは壊滅したままであります。散り散りばらばらに別れ、隣近所の気心の知れた人と共に住みたいという、基本的な願いさえも実現できない状態にあります。発生から一年が経とうとしているのに復旧、復興の足取りは鈍く、復興の主体は言うまでもなく被災した人達住民でありません。積極的な希望の表明と、その実現への努力が必要であります。





被災地神戸には発生以来、心を一つにして「生」を求めた課題から、今新たに加わった多くの問題が渦巻いています。この現実と闘っている人々が内外人、老若男女を問わず、膝を交えながら、くらしの再建の道筋を発見できればと思います。「あの時」から「いま」をしっかりと見据え、「あす」への道へとつないでいきたい。

なお、私どもが所属しています仏教徒のボランティア団体、社団法人神戸青年仏教徒会では、来年一月十七日午前五時四十六分、特に被害の大きかった、東灘区、灘区、中央区、兵庫区、長田区、須磨区の七区を十班編成で、約三時間程ご回向しながら行脚をする企画がまとめられています。全日本仏教青年会や神戸市仏教連合会と当会主催という形でおつとめしながら一緒に歩こうと、全国的に呼びかけをいたしております。ご参加頂ける方がおられましたら、ぜひご連絡下さい。



連絡は

済鱗寺まで

TEL 〇七八―六七二―一二七五

FAX 〇七八―六五一―四九九五

(神戸・済鱗寺住職)

(社)神戸青年仏教徒会理事長)

H.7.7.22
仮設本堂遷座式にて



今年も残すところあとひと月になったが、今年は普段の新聞ばかりでなく、ずいぶんと週刊誌を読んだ。

五千人以上の人が犠牲となった、あの一月十七日の阪神・淡路大震災についての情報、そしてまた、三月二十日の地下鉄サリン事件を機に明るみに出されてきたオウム真理教の犯罪の数々の情報……。これらが知りたくて、新聞の広告や電車の中刷りを見ては週刊誌を買った。

そして、これらを買いつづけているうちに一つのこと気がついた。買った週刊誌を家に持って帰っていないことだった。職場に置きっぱなしにしたり、駅のホームのごみ箱に捨てたりしていた。なぜか。

多くの週刊誌に、まったくそれが当たり前であるかのようにヘアヌードが堂々と掲載されているからであつた。家にいる妻子に見せたくない、という気持ちで働いていたようだ。

と、気がついたら、やたらにそれらの週刊誌に腹がたつてきた。サラサラつとページをめくっていたものを一ページ一ページ見直してみた。モデルさん、撮影者、編集者には失礼だが、どれもこれも芸術などといえるものではない、と思った。いや、もっと言わせてもらえば、男性が少年時代に女性によせる、あの神聖でおかすべからざる女性像を、根底からくつがえし、女性をただの淫獣とさえ思わせてしまうような写真である。

ヘアヌードなんて見たくない

掲載する者は「表現の自由」だなどと言うだろうが、そうしたもののが、世の人々にどのような影響を与えるか、彼らは考えているのだろうか。

と、ここまで書いてきて、昔読んだ亀井勝一郎の『愛の無常について』という本の一節が思い出された。

「西洋画集をみていて、ルネッサンスとは何ぞ、女を裸にすることではないか。宗教とは何ぞ。女に厚着させることではないか。こんな感想も湧く次第で、人類史とは、女を裸にしたり、着物を着せたり、言わば快樂と肅正の二重奏をくりかえしてきたと思われるのです」と。

もちろん、週刊誌を買うことはもう止めた。

“悲”の教育

小川有順

もう四十年前も前に公立高校の教員を辞めて
ジャーナリズムの世界に入り、雑誌作りに専
念して停年退職した私が、再び教職に戻ろう
とは夢にも思っていなかった。それも母校に
である。固辞に固辞を重ねた拳句だった、
それでも宗門校とあればこれを仏縁と考え、
自坊からではいささか遠方に過ぎるので土帰
日米の単身赴任に踏み切って間もなく半歳め
を迎えようとしている。私が旧制中学を卒業
したのは昭和二十年だったから、今年でちょ
うど五十年経つわけだが、そんな戦中派生徒
の昔と比較するまでもなく、とにかく今の中
高校生はほとんど挨拶をしない。校長の私に
はむろん、中には日頃何かと接する機会の多
いはずの担任にすら「お早う、ございます」「さ
よなら」がいえないのである。いや、いえな
いのではなく、いわないといったほうがより
正確であろう。着任早々、私は同じ都内の仏
教系女子校を訪れる機会があったが、その学
校の廊下に「きちんと挨拶をしましょう」と
いうポスターが貼ってあったから、これは何
もわが校に限らず、もはや世間一般の風潮な

のだろうといささか安堵はしたものの、しかし考えてみればすいぶん情ない話だし、いつからこんな国になってしまったのかという憤りすら感じられてならないのである。しつけとは「し続ける」ことだと何かで読んだ記憶があるが、家庭での彼らは朝晩の挨拶すらろくに交わさないらしいし、彼らの両親もまた子供に教えるようとはしないのだろう。教育の基本はいうまでもなくまず家庭の生活にあるはずだが、祖父母や父、母や、あるいは兄や姉といった長上に対しての挨拶などは皆無に相違ないし、それを叱ろうとか正しくしつけようといった熱意はおそらく微塵もないに違いない。あるのはただ、受験々々に追いつめられるわが子への期待と、背中合わせにある不安と心配だけだから、他人の迷惑を考えるゆとりが生まれるわけではないのである。私は就任してすぐ、中学生には「他人の痛みをわが痛みとせよ」と訓示し、高校生には「人生の修業時代」と位置づけし、修業者たる者は同時に求道者であるから良き師、良き友、良き書を積極的に求めよとも号令した。とはい

え、千七百名を超える生徒にそれがそう簡単に滲透するはずもなからうことは充分承知している。ことに高校生ともなると目先はまず大学入試で、これは文字どおり優勝劣敗の世界だから心のゆとりの生まれるわけもないのである。極論すれば親友ですら狭き門を前にすれば誰もが敵であり競争相手である。彼らはそのために身も心も疲れきっていて、受験関係以外の書物に親しむ暇もないのが実情なのだ。挨拶をしないのではなく、挨拶もできなような環境に育ってきた生徒達を何とかして救わなければならぬ。十代は十代なりに疲れ果ててしまっている彼らの渴きをどうしたら癒やしてやれるものか——そんな時の私に卒然として起こった思いが「慈悲」の二文字であった。慈悲は即ち抜苦与楽であらうし、慈が与楽なら悲は抜苦である。慈心すなわち与楽は高いところからでも可能であるが、抜苦は自身も下へ降りて行き、共に並び、同列にならなければなかなか実現はむずかしい。教師たる者はすべからず高見の見物ではなく、まず生徒達のところまで降りて行

って自らも彼らと同じ線上に並ばなければならぬ。そして彼らの苦痛をより身近なものと感得した上で、あたかも外科医の如く適切な処置をし患者の苦しみを除く努力をすべきである。悲の教育は慈の教育に較べたらはるかに具体性や現実性を要求される。今から四十二年前の秋、修学旅行の定番ともいっていた奈良、京都のコースを二年生と共に歩いた折のことだ。公立高校だから男女半々のクラス四組の旅だったが、第一夜、京都三条の旅館で私はまったく何の考えもなしに生徒たちが入浴している浴場に入るなり、先客の一人の生徒を名ざして背中を洗ってくれるよう依頼した。すでに十数人が湯舟につかっていたのだが、彼らはその時、口々にこういったものである。「先生が僕らと一緒に風呂に入ってくれるなんて考えてもいなかった」「中学の修学旅行だって先生とは別々だったんだから」私は一瞬、呆っ氣にとられたが、別段、己れの行為をそんなに軽率だったとは思えなかったし、むしろ、半ば喜々として背や足を流してくれる生徒達に感激すらしたほどである。

その折の生徒達は今年に一回くらいの割合いでわが家に遊びにくるのだが、すでに耳順に近づいた彼らはその夜の体験をまるで昨日のこのようによく覚えていて口にする。私は別段、年頃の生徒と一緒に裸のつきあいをすることが、直ちに彼らのところまで降りて行く話しの一つだというわけではないのだが、ただ、彼らと視線を揃えることの大事さを言いたかっただけの話なのである。教師も同じ人間なのだと理解させての上での指導は、教壇の上からするよりはるかに効果もあろうし、それこそ彼らの痛みもより鮮明に理解できるに違いないのだ。思えば私は仏飯を食って成長したくせに、教職を振出しにすいぶん好きなことをし続けてきた気もしないではないのだが、結局は同じ宗門校の後輩を指導する立場に復帰してしまった。おそらく私の生涯はこれを以て終ってしまうであろうが、仏縁という摩訶不思議な縁の奥深さに、ひたすら畏れを抱いているというのが今の偽わらない実感なのである。

(蓮生寺住職・芝中・高校校長)



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

ＴＶウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

現代を生きる 仏教徒として

蓮門青年闘志

私の妻は昔から、ひどい手荒れて悩んでおります。もう何年も皮膚科に通い、薬をつけ続けておりますが、一向に良くなりません。少し治り安心しますと、またすぐぶりかえして、指の先が全て裂けてしまいます。隣りて見ても、何とも痛々しく何か方法はないかと悩むばかりです。

先日ある友人に相談しますと、それは洗剤のせいではないか、合成洗剤を使っていないかと言われました。合成洗剤ってどういうのかと聞きましたら、石鹼以外の全ての洗剤のことだと言われ、そりや使っているよと言って、吹き出してしまいました。その友人は大まじめに自分の家では、純石鹼以外は一切使っていないと言っています。その友人は高校で化学の教師をしておりますが、妻がやはりひどい手荒れて、いろいろと悩み、洗剤の成分などを調べた結果、合成洗剤は有毒であるということに気がつき、それ以来一切使っていないということでした。

「一切って、どういうことか」

「一切は一切さ、食器洗いの洗剤から、洗濯洗剤、床洗いや浴槽磨きまで、もちろんシャンプー、リンス、それに石鹼っていったって、純石鹼でなくてはいけないんだよ、界面活性剤が入っているようなのは同じさ、だからふ

きんソープぐらいしかないんだがね」
「君の家ではそれ全部、その石鹼でこなしているの」

「洗濯は粉石鹼を選んで使っているけど、後は全部さ、そのせいで、妻の手荒れはどんどん良くなっているよ」

この話は私にとって大変ショックでした。婦りに借りた本には、今巷で出回っているありとあらゆる洗剤の名前が列挙され、その有毒性が書かれてありました。それは湿疹やかぶれだけではなく、そそぎきれないで口から体内に入って肝臓を侵すなど、その毒性は強く、特に抵抗力のない赤ちゃんや子供にははつきり現われ、最近の川崎病の原因とも言われているとのことでした。アトピー、喘息といった現代病の原因の一端であることは、紛れもない事実なのです。そしてこうした事実には、企業の利益優先のために全て隠蔽されているのです。

私達は何も知らずに科学の恩恵と喜んで、合成洗剤ばかりを使っているのです。科学の発達は必ずしも、人類の幸福ではないということ、私達は原子力の誕生の時気がついたはず。しかしこれ程身近に文明の恥部があろうとは思いませんでした。そしてそう気がついたとき、生活の近辺を見えますと、

我々が食べている食物は、全てこれ化学肥料と農薬の成果であり、毎日使っている電気は、その何割かを原子力発電によっているのです。そう言えば何年か前の新聞に、原発に反対する人は冷蔵庫やテレビは使わないでくれという、ある国務大臣の言葉が出ていました。

我々は文化文明を否定できないから、こうした現実を、現代人の宿命として受け止め、生きて行くしかないのでしょうか。命を代償として、便利と合理性を求めた現代人の悲劇とするしかないのでしょうか。

しかし先の洗剤の例でも言えるように、その利益を得ているのは消費者ではなく間違いない生産者企業です。洗剤で白くなったといってもそれは蛍光増白剤のせいで、白に染めていたと言つてもいいそうです。そうなる企業利益のために我々はだまされているに過ぎません。まさにうわ塗りされ、ごまかされて生きている。現代の我々を象徴しているように思えてなりません。

そしてこうした例をもっと一つ食べ物からみてみますと、先のチェルノブイリの原発事故以来、放射能汚染された食物の輸入について、他のアジア諸国に比べますと、日本政府は恐ろしく寛大な三七〇ベクレル以上がだめという基準値をあげています。そして厚生省はこ

の基準値は絶対安全な基準ですと言いつつています。しかしタイやフィリピンと比べてもそれは何と十倍以上の基準値です。そしてタイなど他の国では荷揚げを拒否された、高い放射能を測定された食品で日本に輸入されているものは、スパゲティ、マカロニ、キャンデー、蜂蜜、豚肉、ハム、トマトビュレ・ペースト等であり、また原料としてはチーズ、ビール、ワインや、育児用粉ミルクの甘みをつける乳糖等です。こうしてみたととき相手が放射能なのですから、日本政府が本当に我々の命のことを考えているのか疑わざるをえないのです。

そして、原子力発電です。今世界中が原発に関して消極的、もしくは凍結に動いているこの時期に、日本だけは四十年後には今国内にある三十四基の六倍を作ろうとしているのです。事故がおきないと誰が言えるのでしょうか。アメリカのスリーマイル島の事故の時うちの原発は安全だから事故はないと豪語したのはロシアの技術者です。

これ全て科学文明が作り出した所産だから、そして数多くの恩恵を被っているのだから、多少の恐怖や、身体的異常など現代人は甘んじて受けなければならないというのでしょうか。しかしこの恩恵に欲すという言葉の影で、

莫大な利益を得ている政治家と一部大企業主の顔が、私には見え隠れしてようがありません。

海外からエコノミック・アニマルと誹謗されている、今の日本人の真の被害者は、まさに我々日本人自身なのだと思ふかされたのです。

『正見』という言葉があります。ご存知の八正道の一番最初の言葉ですが、今私たちが仏教徒に一番必要な言葉ではないでしょうか。政治家や企業の思惑に影響されずに、正しく真実を見てゆく眼、どんな状況でも変わらぬ見続けられる眼をもつことだと思います。

現代の科学がもたらした恩恵といわれる、早くて、便利で、快適な生活を、本当に人間のためによかったのかどうか、見直す時期にきているのです。

そして阪神大震災のような大地震が次にどこで起こるとも限りません。地震国である日本には、原子力発電所などは、絶対に要らないと言わなければならないのです。そのことを強く言い続けることが、仏教徒としての義務なのではないでしょうか。

秋 初冬 誌 上 投 句

箱根路の史跡尋ねて栗のめし

寺社めぐり大原の里秋高し

児玉良男（静岡）

かすむ目で新聞を読む秋日和

くつろいで家で味わう茶席菓子

中西泰代（長野）

あけはなつ御堂くまなし草の花

萩の露こぼし技折戸ひらきけり

水涸れし用水覆ひ草もみじ

渡り鳥憩ふ一羽の向きたがへ

別れ蚊や門灯ひとつつつ点り

菊日和槌の交互に屋根普請

薪くべる土間の暗さや柿の秋

一葉の行間読みし秋の暮

コスモスの中の小さき喫茶店

戻り来し鍵っ子の胸草じらみ

内堀綾子
(東京)

人住まぬ屋根のポールや冬近し

子は眠るぎんなんの下風渡る

朝の鐘十方世界の雪に打つ

一拝一鐘昂きらめく除夜の鐘

秋高し空に空色かくありき

右しなの左は読めぬ秋の暮

近藤啞々砂
(東京)

良誉一慧
(埼玉)

児玉仁良
(埼玉)

V読O者のC声E

●今月楽しみに待っております。内容の一層の充実を感じます。俳句がもう少し掲載されていると尚よろしいです。

(広島県 戒善寺 高雄達善)

■俳句については、同様のご希望が大変多く、編集部でも誌上投句会の尚一層の充実、拡大をはかるとともに、それがやがてもっと大きな輪となり、皆さまにお集りいだいて「浄土の句会」「浄土の吟行」などの開催が可能になるといいな、と夢想しております。けれど、それにはもっと沢山の方に呼び掛けて浄土の会員、読者そのものをもっと増やしていく必要があります。そのうえで

初心者の方も熟練の方も御一緒に俳句を通じたお仲間、お友だちを広く創っていただければ、と考えます。どうか編集部にお力をお貸しください。

●編集スタッフが変わったせいでしようか、浄土の信仰を深める文章がふえ、好感をもつて読ませて頂いています。ありがとうございます。

■こちらこそ有り画うございます。
(宮城県 善導寺)

長谷川編集チーフ以下、いつも伝統の雑誌「浄土」にとつて最も相応しい誌面づくりとは何かを考え、心掛けているつもりですが、いたらない点は沢山あるかと思えます。こ

れからお気づきのところがありましたら遠慮なくご指摘ください。

●表紙、口絵など爽やかで感じがよい。巻頭から真ん中まで少し固すぎるような気がするが雑誌の性格上仕方ないのかもしれない。Jフォーラムは面白い。全体にもっと冒險を。

(東京都 長谷川裕)

■伝統と現代とが交叉し、衝突し、あるいは和解し、協調する、そういった瞬間瞬間の積み重ねこそ、我々は生きているのではないかと思えます。面白いことにむしろ、編集集には戦前の増刊号当時の鮮度や輝きに学ぶものが多いのです。仰る通りもっと冒險的な誌面を目指します。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五—三一四—七七六八
☎〇七五—三一五—三七五三

●J・FORUM(浄土フォーラム)

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー「J・FORUM」。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんの方の作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の特集でほとんどご応募ください。私たち編集部では、読書の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内
2 俳句・短歌・川柳など…二首まで
3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

：適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。11・12月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容
3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他、ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もちろん記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。(住所、氏名、電話番号をお忘れなく)

●新規会員募集のお知らせ

当会では随時新規会員を募集しています。檀信徒、お知り合いの方々にも本誌のご購読をお勧め下さい。年会費は六千円です。また、ご寺院の皆様方にはなるべく一般会員へのご入会をお願いさせて頂いております(年会費三万円)。一般会員の方には本誌を毎月五部お送りしています。

また、お友達への贈りものにされてみてはいかがでしょうか。ご贈呈先のご住所、お名前をお知

らせて下さい。あなたからのプレゼントであること
をお伝えして発送させて頂きます。きつとあなたの
あたたかいまごころが伝わるでしょう。

●新規会員登録（敬称略、順不同）

〈購読会員〉

*千葉 安房郡 浄蓮寺

*長野 長野市 田中純道

*山梨 東八代郡 西蓮寺

*山梨 東八代郡 養福寺

●会費ご請求のお知らせ

近日、平成七年度会費をまだお納め頂いていな
い方へご請求をさせて頂き、同封の振込用
紙にて、忘れずに、お早めにご送金下さいませよ
うお願い致します。なお、ご不明の点はお尋ね下
さい。

●バックナンバーのご案内

一昨年四月号以降のバックナンバーがございま
す。ご希望の方、また掲載内容をお知りになりた
い方お問い合わせ下さい。なお、一九九四年二、

五、十一月号は残部僅少につき、お分けすること
ができませんので、あらかじめご了承下さい。

●一月号予告

国際的仏教学者であり、現在東方学院院长、東
京大学名誉教授の中村元博士に、当編集部スタッ
フがお話をお伺いしました。

生い立ちから、インド哲学を志したいきさつや、
現在博士の仏教、法然上人に寄せる思い、世界平
和への願いなど、他では聞くことができない博士
のお心を紹介します。

アンケート、お問い合わせ、投稿は……

法然上人鑽仰会

〒一〇五 東京都港区芝公園四―七―四

明照会館内

TEL 〇二―三五七八―六九四七

FAX 〇二―三五七八―七〇三六



再会を祈りし手にも師走かな

岱潤

先日真向かいのお寺さんの奥様が急逝された。まだ六十三歳という年齢でもあり、またあつと言う間のご逝去であつたため、ご家族の落胆は相当のものであつた。

極楽に還るといふ宗祖の言葉を思い出しながらも、二度とその温顔と、その声とまみえることができない悲しみは、私たちにさえつらく堪え難いものであつた。

カレンダーを残り一枚にしたこの年の瀬、病床の年配の方にはさぞや、心細いことであらう。そしてそれを見守るご家族のご心痛、その苦しみを少しでも理解できる僧侶になりたい。

編集チーフを命ぜられ、早いものでもう一年がたとうとしている。それぞれが仕事をもっている忙しいスタッフと共に、試行錯誤の一年であつたやらないと思つて発表したことの半分もできていない一年ではあるが、どうやら月刊誌は、毎月発行することができたこと、スタッフの諸氏、佐山氏、近藤氏、日高氏はじめ、裏方の多くの皆さんのお力と感謝したい。

また今年一年、十二回に渡ってブナ林のすばらしい写真をご提供頂き、表紙を飾ってくれた御所野洋幸先生にお礼を申し上げたい。毎回自然とのふれあいをあたたかいた文章で綴って頂き、共生という現代の私たちのメインテーマを、見事に表現して頂いた。心から感謝申し上げる。

来年度の表紙は、公園の管理をしなから野草をカメラに撮り続けている石井敏之先生にお願いした。それはきつと、目立つことがなくとも、しっかりと発刊を続けている本誌のよう、清らかな芳香を放ってくれることだろう。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
村田洋一
太田正孝
石上俊教
佐山哲郎

編集協力

オフィス類代表 佐山哲郎

編集顧問

大室了晴

浄土

六十一巻十二月号 頒価六百元
年間費六千元

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷——平成七年十月二十五日
発行——平成七年十二月一日

編集人

発行人

印刷所

写真植字

宮林昭彦
牧田諦亮

株式会社 平文社
株式会社 シータイイー

〒一〇五 東京都港区芝公園四十七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三三三七八)六九四七
FAX〇三(三三三七八)七〇三六



使えるよなあ、こいつ。



こんどのパルサーは、 たのしい新実用主義。

○ いろんな機能性に、目こぼしがあるのが新しいのだ。それが、
○ こんどのパルサーのたのしい新実用主義。しっかり暮らし、
○ しっかり仕事する。しっかり生活する。Mr.しっかりのこれからを、
○ 気持ちよくサポートします。

これ安心
■運転席SRSエアバッグ
システム全車標準装備。



走る走る

- 快走: マルタリンパワーシステムエンジン(リヤ)。
- うれしい低燃費=1500X1(5速フロアシフト) 19.2km/ℓ、1500REZZOプライマリ(5速フロアシフト)19.8km/ℓ、10-15モード燃費/運転省費優待。

らくちん

- 上質感のある、しなやかな乗りこころ。
- ゆったり室内スペース。

ツイてる

- 新型エアコン。
- トランク、ポケット等、収納性じょうずさん。

パルサー4ドアセダン
1500CJ-1(5速フロアシフト)

131.3万円

パルサー4ドアセダン
1500X1(5速フロアシフト)

148.4万円

上記価格にはメーカーオプション(メーカー希望小売価格) 12.1万円(消費税別)が含まれております。

上記価格はいずれも全国メーカー希望小売価格(国・北海道・沖縄)

Mr. しっかり 新パルサー誕生

[Mr.しっかり] 日常ファン活用。①新パルサーの別名。②新パルサーに乗る人の愛称。

③～状態……新パルサーでたのしい人生を送っている様子。

●PHOTO: パルサー4ドアセダン1500X1、ボディカラーはブルー・イシシールパール(※B10)、スポーツパッケージはメーカーオプション。●希望小売価格はスペアタイヤ・標準工具付。寒冷地仕様は1.7万円高となります。●保険料、税金(消費税含む)、登録等に併せて費用は別途申し受けます。●希望小売価格は参考価格です。価格は販売会社が独自に決めていますのでそれぞれの販売会社にお問い合わせください。●日産自動車 お客様相談室 全国共通フリーダイヤル 0120-315-232 ●お求めは、お近くのスカイライン、ブルーバード、日産チェリー各販売会社へ。



その手にあなたの 冬物語。



冬は物語をつくる名人です。ほかの季節にはない
銀世界や星空や暖炉を用意して、
人と人の新しい出会いをつつります。
サッポロ冬物語、ことしも出ました。あなただけの
物語を演出する、冬だけの生ビールです。



冬季限定醸造

SAPPORO

冬物語

あきかんはリサイクルへ。ビールは、20歳になってから。

サッポロビール株式会社 ご協力をお願い：自動販売機による
酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。